

# 博士論文要旨

題目 育児困難心性尺度の開発  
(Development of a scale of perceived difficulty in child-rearing)

指導教授 西村 真実子 教授

入学年月 平成 23 年 4 月 入学

学籍番号 1107603

氏名 寺井 孝弘

## 研究背景と研究目的

現代は核家族化や地域社会の繋がりの希薄化から、孤立した育児となる可能性が高く、年々増加している児童虐待相談対応件数からも厳しい育児状況が推察される。その対策として、健やか親子 21（第 2 次）で「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」などを掲げ、きめ細かい個別の支援が推進されている。しかし、育てにくさを感じるなど、支援が必要な親を的確に把握することは難しいため、「育児困難」という育児状況に着目し、その育児困難に影響する親の心理的特徴を把握することで、支援の必要な親をアセスメントする指標を作成しようと考えた。

本研究で検討を行った育児困難心性尺度は、子ども時代に虐待状況に曝されていた者が体得した対処行動や行動様式が、大人になった際の生きづらさや対人関係の困難につながり、親になった際には育児場面などで困難を感じることもあるという世代間伝達の考え方を基本としている。そもそも育児困難は研究者によって、扱われ方が一定ではなく、「虐待の前の段階」や「育児不安の構成要素である」、「虐待と同様である」などがあり、実際の育児困難を感じる親の特徴や表出のされかたも様々である。よって、育児困難や軽微な虐待状況に曝された者の心理的な特徴を広く集め、これらを本尺度の項目とした。本尺度の内容妥当性は、育児困難や虐待事例の支援に熟練した専門家の意見により確認済みである。本研究の目的は、この育児困難心性尺度の更なる妥当性と信頼性を検討することである。

## 研究方法

研究方法は横断的研究による尺度開発である。全国の乳幼児がいる親 370 名が育児困難心性尺度原案 37 項目について、自分にどの程度一致するかを 7 段階で回答した結果を分析した。尺度開発の手順として、妥当性は構成概念妥当性（因子妥当性）と基準関連妥当性（併存妥当性）を検討し、信頼性は内部一貫性（Cronbach's の  $\alpha$  係数）を検討することで確認を行った。併存妥当性には、外部基準として、育児困難と関係することがわかっている抑うつ傾向（Postnatal Depression Scale：以下 EPDS と、本尺度の基本的な考え方である世代間伝達を確認する、子ども時代の被養育体験（日本版 Parental Bonding Instrument：以下 PBI を用いた。なお、本研究は石川県立看護大学倫理委員会の承認を得て実施した（第 698 号）。

## 研究結果および考察

育児困難心性尺度原案 37 項目は、因子分析等の検討過程で 3 項目を除外し、34 項目 4 因

子が妥当であると考えられた。因子名と Cronbach's の  $\alpha$  係数は、それぞれ第 I 因子『見捨てられ不安』9 項目 ( $\alpha=.899$ )、第 II 因子『自信のなさによる不安』13 項目 ( $\alpha=.868$ )、第 III 因子『猜疑心』5 項目 ( $\alpha=.832$ )、第 IV 因子『完璧主義』7 項目 ( $\alpha=.793$ ) であった。探索的因子分析後の確認的因子分析では、適合度指標  $\chi^2$  (CMIN) =1981.581、自由度 ( $df$ ) = 521、 $p < .001$ 、GFI (Goodness of Fit Index) =.752、AGFI (Adjusted Goodness of Fit Index) =.717、CFI (Comparative Fit Index) =.776、RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation) =.087 であり、今後のモデル適合度を高めていくさらなる検討が必要であると考えられた。

また、併存妥当性において、EPDS との Spearman の順位相関係数は、『見捨てられ不安』 $r = .358$ ,  $p < .01$ 、『自信のなさによる不安』 $r = .535$ ,  $p < .01$ 、『猜疑心』 $r = .395$ ,  $p < .01$ 、『完璧主義』 $r = .478$ ,  $p < .01$  であり、育児困難心性の 4 つ全ての因子と一定以上の相関がみられ、抑うつ傾向がある親は育児困難心性が高かった。さらに、PBI の 2 因子 (Care factor : 以下 CA と Over-Protection factor : 以下 OP) との相関係数は、CA と『自信のなさによる不安』 $r = -.293$ ,  $p < .01$ 、『猜疑心』 $r = -.257$ ,  $p < .01$ 、『完璧主義』 $r = -.251$ ,  $p < .01$  であり、OP と『自信のなさによる不安』 $r = .316$ ,  $p < .01$ 、『完璧主義』 $r = .200$ ,  $p < .01$  であった ( $r \geq .200$ ) であった。つまり、養護的に育てられなかったと認識している親 (CA 低値) は育児困難心性 (3 因子) が高く、過保護に育てられたと認識している親 (OP 高値) は育児困難心性 (2 因子) が高かった。本尺度と抑うつ傾向および非養護的・過保護という不適切な養育体験との関係がみられたことにより、併存妥当性が確保できたと考えた。また、信頼性係数である Cronbach's の  $\alpha$  係数は『完璧主義』でわずかに 0.8 を下回ったが、他の 3 因子は 0.8 以上と十分な値が得られた。

以上の検討結果より、本尺度は一定の妥当性・信頼性を有すると考えられた。一方、因子の解釈に一部困難な点があるため、項目の文言修正等を検討したり、専門家から因子名の妥当性に関する意見をもらい、尺度としての完成度を上げていく必要がある。同時に、育児期の親と関わる専門家が、乳児全戸訪問事業など初期の育児段階で親の育児困難のリスクを把握する際に本尺度を活用し、その後育児困難や虐待が発生するかどうかを他のリスク要因とともに追跡する縦断的研究をすることにより、予測妥当性を検討することも重要である。

## 結論

本研究で妥当性・信頼性を検討した育児困難心性尺度は、一部の項目の解釈において更なる検討の余地はあるが、34 項目 4 因子 (見捨てられ不安、自信のなさによる不安、猜疑心、完璧主義) 構造で一定のまとまりを認めた。育児困難に陥りやすい親の心理的特徴を明らかにしたリスクアセスメント指標はなく、本尺度は親と関わる様々な援助職者の教育や、心理的特徴を配慮した虐待の未然防止に向けた支援方法の提案・開発に寄与できる。

また、臨床応用としては、親自身に項目をチェックしてもらい、面談時に、強く当てはまると回答された心理的特徴 (項目) に関連する悩みや具体的な場面状況、対処行動などを親が語りやすいように質問するなど、専門家がコミュニケーションの中で育児困難や虐待リスクを把握し、支援していくことに寄与できる可能性がある。